

目次

はじめに

第1章 テストの答えの正しさ……………1

1 一致 3

2 同一性 5

3 同型 7

4 物体 11

a 鉛微粒子のパターン／b 同一性の根本原理

5 文 20

6 文の内容 26

7 事実 30

8 同型理論 33

a 程度の問題／b 部分の問題／c 否定の問題

9 相関理論 43

a 真理／b 嘘／c 真の内容

第2章 事実の存在……………51

1 ナイーヴ・リアリズム 53

2 正しさの確証 56

3 懐疑論 61

4 観念論 65

5 超越的観念論 68

a Bタイプ超越的観念論／b 最良の説明への推論／c K
タイプ超越的観念論

6 ナイーヴ・リアリズムふたたび 82

a 確証と懐疑論／b 因果関係と相関／c 因果関係と最良
の説明／d 事実との相関

第3章 アンパイアの正しさ……………99

1 規範的正しさ 101

2	意味規範の任意性	191
1	意味規範	167
	a 言葉の使用／b 意味の一義的決定／c 意味と発話傾向 ／d 意味の社会性	
第5章	意味の正しさ	163
3	倫理的行為規範	136
	a 最大幸福欲求主義／b 倫理的義務主義／c 倫理リアリズム ／d 倫理のユーモア説	
2	目的と行為規範	125
	a 欲求と思い／b 意志決定	
1	法律と行為規範	121
第4章	行為の正しさ	119
3	事実性と規範性	115
2	アンパイアの必要性	111
	a ストライクの定義／b アンパイアの役割	

3 そのほかの言語的な正しさ 195

- a 統語論的な正しさ／b 表現論的な正しさ／c 語用論的な正しさ

第6章 量計測に関する正しさ……………203

1 キログラム原器 205


2 正確な質量 210

3 関係の基礎性 215

4 アプリオリ性 221

- a 多義性／b 個体と記述

あとがき 235



第1章

テストの答えの正しさ



「正しい」という概念が当たり前に使われる状況はいろいろあるかもしれないが、そのうちで最も典型的なのは、テストという状況だろう。たとえば、学校でのテストである。学校でテストをうけるのは誰もがみんな経験していることなので、それを例にとることにしよう。学校のテストの答えが正しいとはどういうことかについて、理屈を駆使して注意深く考えることから始めることにする。

1 一致

月曜日の第四時限に理科のテストがあり、「内太陽系の惑星をすべて質量の大きい順に列挙せよ」という問題が出されたとする。それに「水星、金星、地球、火星」と答えたらそれは正しくない。「火星、地球、金星、水星」という答えもまちがっている。「地球、金星、火星、水星」が正しい答えである。では、なぜそれが正しい答えで、ほかの答えはすべてまちがいのだろうか。

「それはそのテストの模範解答用紙に記入された答えと一致し、ほかの答えはその模範解答用紙に記入された答えと一致しないから」と言ったとしよう。これはもつとも聞こえるかもしれない。模範解答用紙の答えは理科の先生が書いたものであり、理科の先生は内太陽系の惑星の質量のようないことがらに關してはたよりになる。だが、「地球、金星、火星、水星」という答えが正しく、そのほかの答えが正しくないということの説明としては、この説明はもの足りない。正しい答えの正しさを、模範解答というもう一つの答えとの一致として説明しているにすぎない。それがなぜもの足りないかという点、模範解答が正しい答えだということを仮定しているからである。

そういう仮定が偽だと言っているのではない。模範解答を書いた先生は理科の先生として有能であり、模範解答は正しい。そうではなくて、その仮定は、「内太陽系の惑星を質量の大きい順に列挙せよ」というテスト問題の答えとしてなぜ「地球、金星、火星、水星」が正しい答えなのかの理

由の核心に触れていない、という意味でもの足りないのである。

月曜日の第四時限にあった理科のテストに出されたこの問題と同じ問題が、たまたま金曜日の第五時限にあったテストにも出されていて、後者のテストの模範解答は別の先生が書いたとしたらどうだろう。同じ問題への同じ答えを、二つの別々の模範解答用紙に別々になされた記入によって説明するのはまずいだろう。さらに、別の学校でのテストで同じ問題が出たとすれば、その問題の答えとしても「地球、金星、火星、水星」は正しい。それがなぜかを説明するのに当初の学校の先生に言及するのはおかどちがいである(当初の学校の両先生はその別の学校とは何のかかわりもないとする)。いつどこでいかなる状況下で出されても「内太陽系の惑星を質量の大きい順に列挙せよ」というテスト問題の答えとして「地球、金星、火星、水星」が正しいのはなぜか、ということの一般的な説明がほしいのである。

そのためには、そのテスト問題について語る必要があるのは当然だが、その問題に本質的でないことについて語ることは避けるべきである。そのテスト問題は、内太陽系の惑星とその質量の比較についての問題なのであり、模範解答や理科の先生の行為についてはない。「地球、金星、火星、水星」という答えがその問題の答えとして正しいのは、内太陽系の惑星とその質量に関する何らかの事実によるのであって、模範解答や理科の先生に関する事実によるものではない。そもそも、先生が模範解答用紙に書いた答えの正しさ自体が、内太陽系の惑星とその質量に関する同じその事実によって説明されるべきなのである。生徒が自分の解答用紙に書いた答えだろうが先生が模範解答用紙に書いた答えだろうが、当の問題へのすべての答えの正しさは、一様にその事実によって説明

される。では、その事実とはどんな事実か。

それは、あきらかである。「内太陽系の惑星の質量は、地球、金星、火星、水星の順に大きい(かつそれ以外に内太陽系の惑星はない)」という事実にはかならない。「地球、金星、火星、水星」という答えが正しいのは、この事実に一致しているからである。これは、いたって当たり前のことであり、この当たり前前は、「正しい」という概念が(少なくともテストの答えに関するかぎり)いかに透明でわかりやすい概念かということを実に示している。

では、この概念の透明性に留意しながら、いよいよ哲学的に実のあるトピックをあつかうことにしよう。そうするにあたっては、一つ一つのトピックについて注意深く概念分析をすすめていくので、ウサギではなくカメになったつもりで、あせらず辛抱強くゆっくり、だが確実に前進しようとする態度が大事である。

2 同一性

答えが事実と一致するというのは、正確にはどういうことなのだろうか。たとえば、「子の血液型が親のと一致する」と言った場合の「一致する」は「同一である」という意味である。もし子がA型で親がA型だったり、子がB型で親がB型だったりすれば、「子の血液型が親のと一致する」と言うが、子がA型で親がO型だったり、子がB型で親がAB型だったらそれは言わない。つまり、ここで言う「同一」というのは「一つのもの」という意味である。二つや三つや、そのほかの数で

はなく一つだということである。それを強調して「数的同一性」と呼ぶこともある。ただたんに似ているということではない。同一性は類似性ではない。同一ならば類似する(すべてのものはそれ自身と類似する)が、類似しているからといって同一だとは限らない。

たとえエミとユミが非常に似ていて、彼女ら自身以外の誰もエミとユミを区別できなかったとしても、それだけの理由でエミとユミは同一人物だと結論するのは論外である。「区別できないほど似ているが同一ではない」は矛盾しない。別の言い方をすれば、類似性は同一性を含意しない。

ならば、「すべての性質を共有するが同一ではない」も同様に無矛盾なのだろうか。いや、そうではない。たんに区別できないほど似ているだけでなく、すべての性質を共有するとしたら、エミとユミは同一人物でなければならぬ。なぜなら、エミは「エミと同一である」という性質をもっているのも、もしユミがエミのもつすべての性質をもつとしたら、その性質ももっていなければならぬが、そうだとすると、ユミはエミと同一であることになるからである。

同一性についてはさらにいろいろとおもしろい論点があるのだが、ここで触れるのはひかえておこう(あとで触れる機会がある)。「子が親と血液型が一致する」の例のように、「一致する」は「同一である」を意味することがある、ということを明瞭なかたちで確認するにとどめておこう。

では、「答えが事実と一致する」と言うときの「一致する」はどうか。これも「同一である」という意味なのか。いや、そうではないのである。たとえば、「金星は火星より質量が大きい」という答えと、それを正しい答えにしている事実とは同一ではない。前者が地球表面上でテストの解答用紙に書き込まれた答えであるのに対し、後者は地球からかなり離れた宇宙空間で成り立っている

事実である。同一であるはずがない。にもかかわらず「一致」はしているのである。同一ではない(すなわち一つではない)この二つのものがいかなる意味で「一致」していると言えるのか。それをあきらかにするために、まず、テストの答えと事実の一致よりも、さらにわかりやすい一致の例からはじめることにしよう。

3 同型

手袋があるとするとする。右手の手袋と左手の手袋は、対になっているならば、はみ出すことなく向かい合わせに完全に重ねることができる。そういう重ね合わせでは、右手の親指には左手の親指が、右手の人差し指には左手の人差し指が、等々、対応している。指だけではなく、右手のどの部分も左手の何らかの部分に対応し、左手のどの部分も右手の何らかの部分に対応している。さらに、もし右手のいくつかの部分のあいだに特定の関係があれば、その部分に対応する左手のいくつかの部分のあいだにも同様の関係がある、そしてその逆も真である。たとえば、右手の薬指は中指と小指のあいだにあるので、対応する左手の薬指も(左手の)中指と小指のあいだにある。右手の手袋と左手の手袋は同一ではないが、このようにかなり親密な対応関係にある。このような対応関係があるものを「同型である」と言うことにしよう。

同型なものには手袋以外にもいろいろある。たとえば靴。左靴と右靴は同型である。手袋や靴のように対として製造されていないなくても、同型のものはいくつもある。同じデザインで作られた二つの

ワイシャツは同型である。いっぽうの襟には他方の襟が対応し、いっぽうの第一ボタンには他方の第一ボタンが対応する。両方ともMサイズならば対の手袋のように完全に重ね合わせることもできる。

では、一つがSサイズでもう一つがLサイズだったらどうだろう。完全に重ね合わせることはできない。ということは同型ではないということなのか。いや、そうではない。Sサイズのシャツの隣接する二つのボタンのあいだの距離はLサイズのシャツの対応する二つのボタンの距離と同じではないが、ある一定の比率で後者が前者を上回り、どの隣接するボタンについてもこの比率は変わらない。Lサイズのシャツを洗濯して乾燥機に入れ、ころあいをはかってとり出せば、ちょうどよく縮んでSサイズのシャツと完全に重ね合わせることができる(としよう)。また、もしその逆ができる機械があれば、その機械を使ってSサイズのシャツを大きくしてLサイズのシャツと完全に重ね合わせることができる。

「そんな機械はない。それに、Lサイズのシャツを乾燥機に入れても、Sサイズのシャツと完全に同じサイズに縮ませるのはまず無理だ」。こういう反論があるかもしれないが、じつさいにそういう収縮や拡大を可能にする機械があるかないかは、分析哲学的にはまったく重要ではない。同型を定義する対応というのはどういう関係なのかを理解するのに、重ね合わせるといふ行為にもとづいて考えるのはとても有用なのでそう考えたわけだが、同型にじつさいの重ね合わせが必要不可欠だというわけではないのである。何らかの理由でじつさいに重ね合わせることが叶わなくても、想像上で収縮または拡大することで重ね合わせが可能となるならば、それで十分なのである。

ここまでは手袋、靴、シャツなどを例にあげて同型の概念を説明したが、これらの例は、テストの答えと、その答えを正しいものにする事実とのあいだの関係としての同型の例としては適切でないかもしれない。なぜなら、これらの例はどれも、同型関係にある二者が同じ種類のものだからである。右手の手袋と左手の手袋はどちらも手袋だし、右足の靴と左足の靴はどちらも靴、そして、二つの同型のシャツはどちらもシャツである。それにくらべて、テストの答えと事実は同じ種類のものとは言いがたい。同じ種類のものではないが同型であるような例はないのか。幸いにも、あるのだ。

まず、町とその町の地図をあげよう。空から見た町の風景とその町の正確な地図は同型である。駅は駅をしめすアイコンに、美術館は美術館をしめすアイコンに、そして市役所は市役所をしめすアイコンに対応する。駅から美術館までの距離と市役所までの距離は、地図の上で駅をしめすアイコンから美術館をしめすアイコンまでの距離や、市役所をしめすアイコンまでの距離よりはるかに長い。想像の上で町を縮小あるいは地図を拡大すれば、それぞれきちんと重なる。重ならなければ、その地図はその町の正確な地図ではないと言えるだろう。ここで言う地図の「正確さ」にもとづいて、テストの答えの「正しさ」を理解することができるのではないだろうか。つまり、答えが事実に「一致する」とは、地図が町を「正確に」表しているというのと同じたぐいのことだと言いうことができるのではないだろうか。正確な地図が町と同型だという意味で、答えが事実と同型ならばそれは正しい答えだ、と言うことができるのではないだろうか。

もう一つ、今度はもつと込み入った例をあげよう。フランスの画家ジャン・オーギュスト・ドミ

ニク・アングルの一八四五年の作品「ドーソンヴィル伯爵夫人」は、ルイーズ・アルベルティヌ・ド・ブロイの肖像画だが、アングルのその絵とその人物ルイーズとのあいだにある関係が成り立っているということは、リアリステイックな絵を見る目がある人ならば誰にもすぐわかる。モデルとしてポーズをとっていたときのルイーズを目の前にしたアングルの視点から見たルイーズと、アングルが描きあげたキャンヴァス上に付着している絵の具の集まりとしての絵は似ている。たとえば、モデルとしてポーズをとっていたルイーズの左手の親指と人差し指と中指が顎の下部に触れていたのに対応して、キャンヴァス上の絵の具のある部分、すなわち左手の親指と人差し指と中指を描写している部分が、顎の下部を描写している部分のすぐ下に位置する。また、ルイーズの左手親指先は光があたって肌色に見えていたと同時に、第一関節付近は薬指の影によって暗く見えていたのに対応して、キャンヴァス上の絵の具の左手親指先を描写している部分も同様に肌色に見える。第一関節付近を描写している部分は暗く見える。このようなことは、ルイーズのほかの部分とそれを描写しているキャンヴァス上の絵の具の部分についても同じように言える。画家の視点から見たモデルのありようが、キャンヴァス上の絵の具のありようにコピーされている。その意味で後者は前者と同型である。この同型であるという関係がこの絵をリアリステイックな絵にしているのである。

テストの答えが正しいというのは、こういった例でしめされる同型という関係がテストの答えと事実のあいだに存在するということだ、と言えるためには、そもそもテストの答えとは何か、事実とは何か、ということはある程度はつきりさせる必要がある。テストの答えからはじめよう。